

遺書の罪

野村胡堂

—

「親分、ちよいと逢つてお願いしたいという人があるんだが——」

ガラツ八の八五郎は膝つ小僧を揃えて神妙に申上げるのです。

「大層改まりあらたやがったな。金の工面いろことと情事の橋渡しは御免だが、外のことなら大概たいがいのことは引受けるぜ」

平次は安直に居住いを直しました。粉煙草もお小遣も、お上の御用までが種たね切れぎになつて、二三日張合もなく生き伸びている心持の平次だったのです。

「へッ、へッ、へッ、そんなに氣障きざなんじゃありません。御用向きのことです
よ」

「銭形の親分さん、始めてお目にかかります。——私はあの、市ガ谷御納戸町なんどまちの宗方善五郎様の厄介むねかたになって居る茂与もよと申すものでございます」
少し武家風の匂う折目の正しい挨拶を、平次は持て余し気味さかやきに月代を撫でました。

「で、どんな用事で来なすった」

煙草盆を引寄せて吠かますの粉煙草を捻ひねりましたが、火皿に足りそうもないので、苦笑まぎいに紛まぎらせてボンと煙草人を投ります。

「外でもございませぬ。私が厄介むねかたになって居ります、宗方家の主人善五郎様は、ゆうべ人手に掛って相果てました」

「殺されたと言いなさるのかい」

「ハイ、殺されたとなりますと、何彼なにかと後が面倒なので、御親類方が集まって、自害こしらの体に拵こしらえ、たくさんのお金まで費って、証人の口を塞ふさぎました。明日

お葬ひつといを済ませば、死人に口なし、それつきりになってしまつて、殺した人は陰で笑つて居ることでございますよ」

「お前さんはそれが気に入らないというのかえ」

「宗方善五郎様は五十を越した御浪人ですが、元は立派な御武家でございます。御武家が死にようもあろうに首を吊つつて死んでは、お腰の物の手前まつだい末代までの恥でございます」

平次は尤もつともらしく手などを拱こまぬきました。首を縊くるのが誉れである筈はありませんが、それを末代までの恥にする、この人達の氣持にも解らないところがあつたのです。

「自分で首を吊つるのが恥は解っているが、人に絞絞り殺されるのもあまり御武家の誉れではあるまいぜ」

「でも、御主人様はこの春から軽い中風で、お身体が不自由でした」

「中風で不自由な年寄りを絞め殺すような悪い野郎もあるのかな」

「あんまりな仕打に、我慢がなり兼ね、何にかの証拠にもと、これを持って参りました」

お茂与という美しい年増は、帯の間から紙入を出して、その中から小さく畳んだ半紙を抜き、皺しわを伸のびして平次の方へ滑らせたのです。

「何んだ、これは書置きじゃないか」

「ハイ」

一、書置のこと。拙者こと万一非業に相果候様のこと有之節は、屹度有峰杉之助を御詮議相成り度く為後日右書き遺し申候也。

月 日

宗 方 善 五 郎 判

御役人様 御中

平次は手に取って眺めて、その打ち顫ふるう手跡しゆせきの間から、不思議な強迫観念きょうはくくわんに

おののく宗方善五郎の恐怖を覗くような気がして、言いようのない不気味なものを感じるのです。

「これは何うしたのだ」

「宗方善五郎様が、生前そつと書き遺して、私に預けて置いたのでございます」

「いつ頃のことだ」

「二た月ばかり前で――」

「こんなものを預かるお前さんは？」

「宗方家遠縁の者で、三年越御厄介になっておりますが、どんな御縁か御主人様はことの外信用して下さいました」

お茂もよ与はこう言つて眉を落すのです。顔がくもると一入ひとしお美しさが引立つて、不思議な魅力が四方に薫くんじます。

「八、行つて見ようか」

「有難い」

八五郎はもう掘つ立て尻になって平次の出勤を待っていたのです。

二

浪人宗方善五郎は、武家の出には相違ありませんが、すっかり町人になりきつて、高利の金などを貸して裕福に暮しておりました。

お茂与は『私が余計なことをしたと思われると、皆んなに辛く当られますか』と尤もなことを言つて裏口へ廻り、平次と八五郎は十手の見識けんしきを真つ向に、

「御免よ」

表向きから入りました。

「あ、銭形の親分」

店にいた近所の衆や、親類の老人達らしいのが、銭形平次の顔を見るとサツと蒼くなりました。お通夜を済ませて、明日はお葬とむらいをするばかりのところへ、飛んだ者が飛込んだと思つたのでしよう。

「気の毒だが、ちよいと仏様に逢わしてくれ」

八五郎がズイと出ました。

「へエー」

「気の毒だが、少し不審がある。構かまわないだらうな」

「検屍は済みましたが、親分さん」

近所の隠居らしいのが、恐る恐る抗議するのを背に聴いて、平次は真つすぐに通りました。

家の中は思いのほか豪勢で、宗方善五郎の裕福さと、高利の金の罪の深刻さを思わせます。

「誰か案内して貰おうか」

ガラツ八は妙に権柄けんべいづくです。それに応えて出て来たのは、先刻平次の家へ来たお茂与、——よくもこう素知らぬ顔が出来たものだと思ふほど、美しく取すましております。

宗方善五郎の死体はまだ奥へ寝かしたまま。首へ巻いてあつた細引ほそびきは取り外してありますが、

「何も彼かももとの通り」

とお茂与は言うのです。

死んだ善五郎は五十少し過ぎというにしては老ふけて見えますが、これは軽い中風のせいだったかも知れません。

「主人の死んでいるのを、誰が一番先に見付けたんだ」

平次の問いは定石通りに進みます。

「私でございました。主人の居間へ来て雨戸を開けますと——」

「雨戸は開いていなかったのだね」

「え、いえ、鍵も棧さんもおりて居ませんから開けようと思えば外からでも開けられます」

「で？」

「雨戸を開けると、主人は細引で絞め殺されて、冷たくなつて床から拔出しております。びっくりして大声を出すと、若旦那の甲子きね太郎たろう様や、奉公人たちが多勢飛んで来ましたが、——殺されたとなると、お上かみ向むきも面倒になるし、商売柄人様に怨うらまれていてるからだ、世間様に思われるのも口惜しいから、鴨居かもいに扱しご帯きを掛けて自分で縊くれ死びんだということにして検屍まで受けたのでございます」

お茂与は静かな調子ながら一糸乱れずに説明して行くのです。

「主人は中風だと言ったね」

と平次。

「え、大した不自由はございませんでしたが、それでも中気でブラブラしている御主人が、鴨居へ扱帯などをかけて、自害するような、そんなことが御自分で出来る筈もございません」

ふみだい 踏台をして覗いて見ると、高い鴨居には、如何様扱帯を通したらしく埃を拭き取った跡もあります。中気の老人が、危なっかしい踏台をして、ここへ扱帯を通すということは、ちよつと受取難いことです。

「その細工に使った扱帯はどれだ」

「これでございます」

お茂与が取出して見せた扱帯は艶めかしくも赤い縮緬で、その端っこの方には、細い紐か何にか堅く結んだような痕があります。

「誰のだえ」

「亡くなったお嬢さんので——」

「フーム」

平次も妙な心持になります。縊死いしの細工をするのに、死んだ娘の赤い扱帯を
持出す番頭や親類もよっほどどうかしております。

「で、主人を殺した細引は？」

「これでございます」

お茂与は押入を開けて、そつと隠して置いたらしい細引を取出しました。ほ
んの五六尺あさなわの麻縄きょうじんですが強靱たくまで逞しくて、これは全く物凄いものです。

「それにしちや細引の跡が薄いようだ」

平次は死体の首筋を覗いて、そつと八五郎に囁きました。

「おや、こいつは何んでしよう」

八五郎は萌黄もえぎの組紐を一本見付けたのです。長さは四尺くらいもあるでしょうか、細くて弱そうな紐ですが、先に結び目をつけて、ひどく埃ほこりで汚れているのが気になります。

「蚊帳かやの釣手でございましょう」

「まだこの辺には蚊かが居るのかい」

「御主人様は大層蚊がお嫌いでした」

お茂与は静かにその疑いを解きました。

三

遺書の罪

伴きねの甲子太郎はまだ二十そこそこの若い男で、武家の匂いもない町人風ですが、一人の親を喪うしなつて逆上ぎやくじようしたものが、眼は血走り、唇もわななき言うこと

は悉くしどろもどろでした。

「気の毒だが、少し訊きたいことがある」

「――」

甲子太郎は黙りこくって固唾かたずを吞みます。

「お前さんも親旦那が自分で首を縊くったものと思つて居なさるのかえ」

平次の問いにはいろいろの意味がありました。

「皆んなで、そう決めてしまいましたよ、親分」

甲子太郎の調子はひどく棄鉢すてばちですが、父親が自殺したとは信じていない様子です。

「すると？」

「親父の首へ細引を掛けた奴を私は堪忍しちやおきません」

「それはどういう意味だね」

甲子太郎は黙りこくつて了しまいました。

「有峰ありみね杉之助という人を知っているだろうな」

平次は話題を変えました。

「町内にいる御浪人ですから、よく知っています」

「その有峰という浪人者が、親旦那を怨んで居るようなことはなかったらうか」

「あつたかも知れませんが、——親父はひどく有峰さんを煙たがっていました」

「有峰という浪人者に殺されるかも知れないと言つたような——」

「飛んでもない、有峰さんは立派な方ですよ」

甲子太郎は平次の言葉を障さかつて、以ての外ほかの首を振るのです。有峰杉之助が評判の良い浪人とは聴きましたが、甲子太郎までこう言おうとは思ひも寄らなかつたのです。

「それじゃ他のことを訊くが——あのお茂与もよという女は、この家の何だえ。掛かかり人のようでもあり、召使いのようでもあり、親類うじとのようでもあるが——」

「——親類なんかじゃありません」

甲子太郎は頑固がんこに首を振りました。ひどくお茂与に反感を抱いている様子です。

「外に身寄の者は？」

「何んにもありませんよ。父一人子一人で、あとは奉公人ばかり。親類と言ったところで三代も四代も前の親類で、少し暮し向きが悪くなれば寄りつかなくなる人達です。親父の首の細引しじきを扱帯しじきに変えても、世の中が無事な方が宜いんですし——」

甲子太郎の憤激ふんげきは、当てもなく爆発し続けるのです。

この上甲子太郎きねの頤あごを取ったところで、大した収穫とくわくがありそうもないと見る

と、平次は番頭の吉兵衛を呼んで、家中を案内させました。

吉兵衛は五十男で、世の中を世辞笑いと妥協で暮して来た男、こんな人間が案外強したたかな魂の持主かもわかりません。

手代は二人、庄八と金次と言って、どっちも三十前後、貸金の取立てには負けおとず劣おとらずの腕前を持っていそうな、逞たくましい感じの人間ですが、相当以上の給金を貰っている外に、主人の善五郎と関係がありそうもなく、主人が死ねば、明日から収入の途を失って、ひどく損をしなければならぬ二人です。

庄八は色白のちよいと良い男、金次は四角の頤と大きな眼を持った男、この人相の怖い金次が案外好人物で、色白の庄八の方が太い魂の持主らしいことは、二言三言交すうちに平次は見抜きました。

平次の問いに対する応答は番頭の吉兵衛と同じようなもの、ただ、お茂与の身分を聴いたとき、庄八は、

「主人はまだ若かつたんですから、一人くらい身の廻りの世話をする者があつても不思議はないでしょう。お茂与さんはあんなに綺麗ですからね、ヘッヘッ」
 卑いやしい笑いが何もかも説明したような気がします。甲子きね太郎がお茂与にひどく反感を持つているのも、お茂与が掛り人でも召使でもあるように見えるのも、これですっかり解るのです。

もう一人下女のお元もとという三十女がいました。強健な相模者さがみで、恐ろしく元氣そうですが、平次が名代の岡っ引と聴いて、齒の根も合わないほどガタガタ顫ふるえております。こんな女に素直に物を言わせるのは、平次も楽な仕事ではありません。

尤も、問いも答えも何んの変哲もなく主人の善五郎が飼犬に手を噛まれるとも知らずに、お茂与にばかり目をかけて、自分をあまりよくしてくれなかったことなどをクドクド言うだけの事ですが、最後に、

「ゆうべ旦那は蚊帳を釣ったかい」

平次の唐突な問いに対して、

「二三日釣らずにいましたが、この辺は山の手でも藪蚊やぶかの多いところで、やはり秋の蚊が出て来るから、今夜は釣って見ようと仰っしゃって——」

「で？」

「釣手は一パイになっているが、中たるみがしていけないから中釣りをしたい。尤も長押もっとなげしへ釘を打てば何んでもないが、それでは家がたまらないから、欄間らんまから鴨居かもいへ紐を一本通してくれと仰しゃって、私は萌黄もえぎの細い紐を見付けて通して上げました。——尤も蚊帳は後でお茂与に釣らせるから宜いと仰しゃって、私はそのまま下がりましたが」

お元の話は妙な方へ発展して行きます。

「その紐はこれかい」

平次は八五郎の拾った萌黄もえぎの紐を見せました。

「え、それですよ」

お元は大きく合点合点をしました。

もういちど吉兵衛に逢って、宗方家むねかたの身上を調べると、貸金はざつと三千両。地所家作が方々にあつた上、店の有金は千五六百両。これはほんの概算がいさんですが、まず浪人上りの金貸としては、お納戸町の悪五郎と言われただけの事はあります。

四

「親分、やはり殺しでしょうね」

家の外をひと廻り、急所急所で足を留める平次へ、追いつがるようにガラッ

八は言うのでした。

「解らないよ」

平次は何にか外の事を考えている様子です。

「へエ——すると下手人は？」

「まるつきり解らないよ、お前は どう思う」

平次は八五郎に水を向けます。

「あつしはやはり有峰ありみねなんとかの助が殺したんだと思いますよ。この通り主人の寝間の外に男足駄の齒の跡があるじゃありませんか」

八五郎は縁の下の柔かい土に印しるされた夥おびただしい跡を指さしました。

「念入りに証拠を残して行ったじゃないか、その上煙草入か印籠いんろうを落して行く
と申分はないんだが」

「おや？ こいつは何んでしよう」

ガラツ八は沓脱くつぬぎの間へ手を入れて、怪し気な紙入を一つ取出しました。もとは立派な縫ぬいいつぶしだったでしょうが、色も褪あせ糸もほつれて、見る影もなくなっている上、中は引っくり返して叩いても何んにも出ないと言う恐ろしい空っぽです。

「こいつは誰のだ、聴いて来てくれ」

「よしッ」

八五郎は飛んで行きましたが、間もなくそれは町内の貧乏な浪人者有峰杉之助の品と聴き込んで帰って来ました。

「その有峰とか言う浪人者に逢って見ようか」

平次はようやくやくそんな気になった様子です。

「そう来なくちゃ面白くねエ」

喜んだ八五郎、平次の後に跟ついて手を揉もんだり額ひたいを叩いたりしております。

「たいそうお茂与の肩を持つようだが、お前は昔からあの女を知っているのか」
「へッ、へッ、ほんの少しばかり」

「へッ、へッじゃないよ。知っているなら正直に白状しておくが宜い。あとで尻が割れるとうるさいぞ」

平次はきめ付けました。

「尻なんざ割れっこありませんよ。あっしは何んにも掛り合いがありませんから」

「掛り合いは大袈裟おおげさだな、いったい何処から這い出した女なんだ。どうせ唯ただの鼠ねずみじゃあるめえ」

「御守殿お茂与もよを親分知りませんか」

「何？ 御守殿お茂与？ あれが御守殿のお茂与の化けたのか、へエー」

平次が感歎したのも無理はありません。御守殿お茂与というのは一時深川の

岡場所で鳴らした強^{したた}か者で、大名の留守居や、浅黄裏^{あさぎうら}の工面の良いのを悩ませ一枚摺^{ずり}にまで謡^{うた}われた名代の女だったのです。

「尤も今じゃすつかり堅気になって、宗方善五郎の奉公人同様に働いているが、旦那が殺されたと知って指を銜^{くわ}えて引込んで居られない。御守殿お茂与の一生の仕事じまい、恩になった宗方の旦那のために、せめて敵を討って上げたい——と涙を流して頼みましたよ」

「それでお前が乗出したのか」

「へエ——」

「へエ——じゃないよ。早くそう言ってくれさえすれば、考えようもあったのに」

「だって宗方善五郎は殺されたには間違いないでしょう」

「まあ宜いや、乗りかかった舟だ。しばらくお茂与の思うままに踊ってやろう。」

おや、もう有峰杉之助という人の浪宅じゃないか」

平次は八五郎を顧みてかえり戦鬪準備を促しました。仕事は第二段に入ったのでしよう。

五

「有峰杉之助は拙者だが、御用の筋は？」

三十五六のまだ壮年の武士でした。さかやき月代も髯も少し延びましたが、それが無精らしくはなく、ほそおもて細面の何んとなく聰明らしい感じのする浪人者です。

「あつしは町方の御用を承る平次と申すものですが、旦那は何んですか、あの宗方善五郎様とは御懇意で——」

平次はさり気なくさぐ搜りを入れます。

「ゆうべ死んだそうだな、——お気の毒な、——昔は同藩であったが、少しも別懇こんではない」

「往来もなさいませぬので」

「しないよ。向うは有徳人うとくじん、私は貧乏人、附き合う方が不思議なくらいだ」

有峰杉之助は面白そうに笑うのです。秋の単衣ひとえがひどく潮垂れて、調度のないガランとした住居は、蟋蟀こおろぎの跳梁ちようりように任せた姿です。

「旦那は——ズケズケ申しますが、あの宗方様を怨んでいるようなことはございませんか」

「怨んでいるよ」

「へエ——」

平次は少し度胆どぎもを抜かれました。杉之助の言葉が予期以上に唐突で正直だったのです。

「怨んでゐる仔細しさいは氣の毒だが話せない」

杉之助は口を緘つぐみました。貧しい住居ですが、机も本箱も鎧櫃よろいびつも槍やりもあり、本箱にはむずかしい四角な文字の本が一パイ詰っている様子が、ひどく平次を頼母たのもしがらせます。同じ家中から、浪人したにしても、高利を貸して大身代こさを拵こさえた宗方善五郎とは何んという違いでしょう。

「それじゃこれを御覧下さいまし」

平次は懐中から半紙一枚の遺書を出して、有峰杉之助の前に皺しわを伸ばします。中氣ちゅうきになってから書いた、宗方善五郎の乱るる筆跡ひっせきのうちに、生命に対する根強い執着しゅうちやくと、有峰杉之助に対する恐怖がありありと読み取れるのです。

「なるほど、こう言った遺書を書く氣になったかも知れぬ。宗方善五郎は氣の毒な男じゃ」

「この遺書一つで、お氣の毒だが旦那は縛られるかも知れません。それより仔細しさい

は斯う斯うと手輕に仰しやっっちゃ下さいませんか」

「左様」

有峰杉之助はなかなか口を開く様子もありません。

「これを御存じですか、旦那」

平次は縫いつぶしの古い紙入を取出しました。

「知っている段か、拙者の品だ、——何処で——」

「宗方善五郎の殺された部屋の前にありましたよ」

「ほう、無一物の紙入が、一人で歩くとは知らなかった、——がそんなことがあるようでは黙っているわけにも行くまい。いかにも宗方善五郎と拙者との関係、詳しく話そう」

有峰杉之助は、ようやく打ち明ける気になった様子です。

その話はかなり混み入ったものですが、簡単に言うと、宗方、有峰兩人とも、

さる中国の大藩に仕え、小禄^{なが}乍ら安らかに暮しておりましたが、御蔵番になつた宗方善五郎は、金銭上のごとに不正があり、若い同役の有峰松次郎——杉之助の弟に難詰^{なんきつ}されて返答に窮^{きゆう}し、松次郎を斬つて本国を立退いたのは、もはや十年も昔のことです。

弟を失つた杉之助は、武家としての生活に疑懼^{ぎぐ}を生じ、そのまま禄^{ろく}を捨てて浪人し、宗方善五郎の隠れ住む江戸に来て、同じ町内の手習師匠などをして、何んとなしに五六年を過しました。

「申す迄もなく、弟御さんの仇を討つ^{つもり}心算で同じ町内に住んだのでしようね、旦那」

平次はたまり兼ねて口を容^いれました。

「いや、それは町人の一応の考えだ」

「と申すと」

「弟の敵や子の敵を討つのは、武士の作法にないことだ」

「へエ——」

平次もそれは氣の付かない事ではなかったのですが、卑属親の敵——例えば子の敵、弟の敵などを討つのは、武士としては悉く恥じたもので、どの藩もそんなものには決して助力も、便宜も与えないばかりでなく、それは私怨として取扱われ、目的は遂げても刑罰は免れることが出来なかつたのです。

「宗方善五郎は藩金を私し、拙者の弟を殺した憎む可き奸賊ではあるが、拙者にはそれを討つべき名分はない。そこで、せめては同じ町内に住んで、悪人の行く末を見窮め、伴が成人の上、故主に帰参のお願いする筈で、今日まで相待つたのじゃ。伴は当年七歳、あとせめて十年」

杉之助の述懐は筋立って少しの疑いも挟みようはありません。

「御尤もで」

平次はそれを全面的に肯定して聴く外はなかったのです。

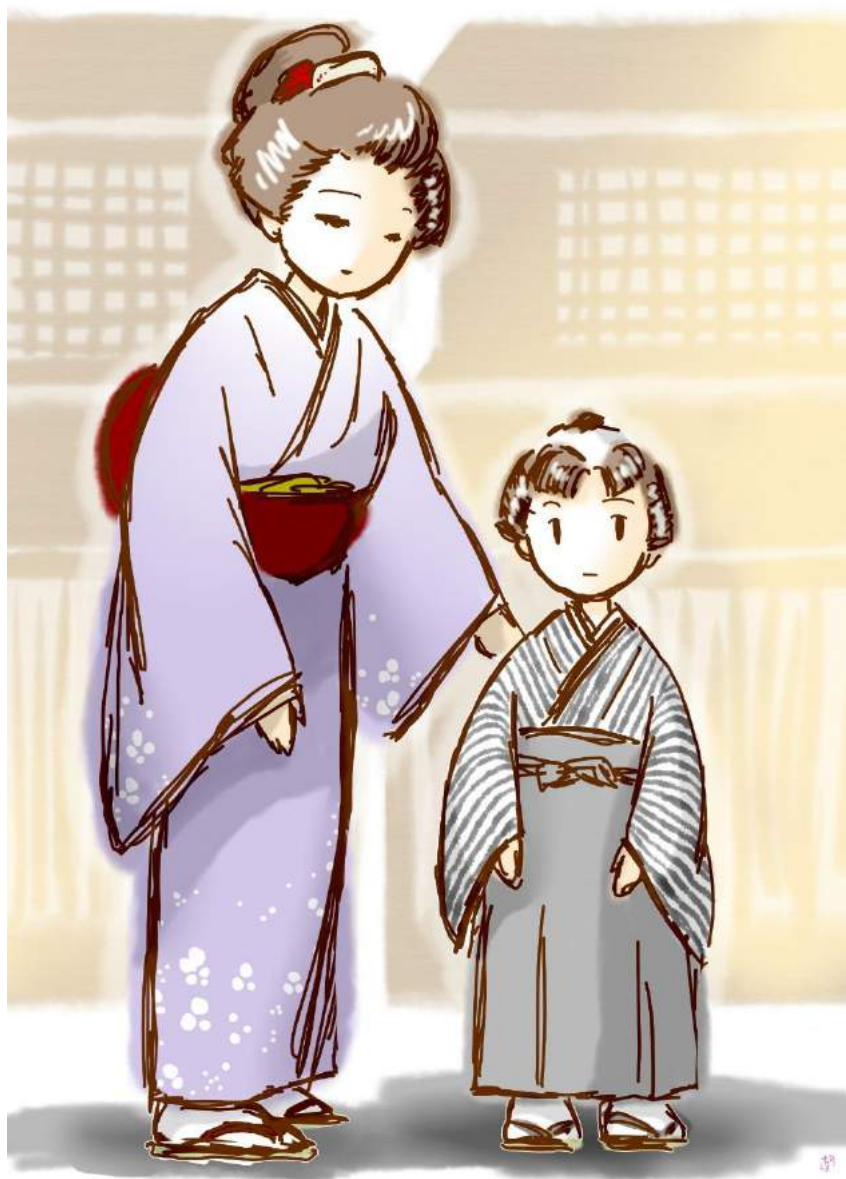
閑居に慣れ、貧乏に慣れ、読書三昧に打ち込んで、有峰杉之助はもう帰参の望みなどはなかったのかも知れませんが、七つになる俣のために、唯一の出世の機会を待っているのです。

「お、杉丸、帰ったか」

折から母親といっしょに帰って来た俣杉丸を迎えて、杉之助の顔はさすがに淋しそうでした。

「ただ今戻りました」

小買物にでも行ったらしい内儀のお延のぶは、杉之助の前に三つ指を突いて、それから平次と八五郎にていねいに挨拶しました。



「へエー、今日は」

武家の内儀に思いのほか丁寧にあしらわれて、八五郎は少し面喰った様子です。

「宗方善五郎は昨夕死んだそうだ、——自害をしたといったな、平次殿」

杉之助は平次を顧みます。

「人手に掛って死んだとも申します」

「まア」

美しい内儀のお延は、何もかも事情を呑込んだらしく、まだいたいけな倅の杉丸を顧みて、聰明らしい眼をしばたたきます。お茂与の取澄ましたのと違って、滋味の豊かな若々しくも美しい母親です。

「旦那は、御守殿お茂与という女を御存じでしょうね」

「知っている、——あれも同国の者だ。今は宗方善五郎の許にいと聴いたが

「——」
そう言う杉之助の言葉のつづくうち、平次は内儀のお延の顔に動く表情を讀んでおりました。

「そのお茂与が、宗方善五郎を殺したのは、有峰の旦那だと言うのですが」
「馬鹿なッ」

一瞬杉之助の顔に激しい表情が動きました。が、寒潭かんたんを渡る雁がんのように、その影が去ると、元の平静に戻ります。

「まア、何んと言う人でしよう。さんざん迷惑をかけた上に——」
内儀のお延はフト舌すべを滑らせて、あわてて口を緘つぐみました。聰明さがツイ、女の本能の憤いぎどおりに破れたという様子です。

「親分いよいよ解らなくなりましたよ。あの有峰という浪人は人など殺しそうにもありませんね」

帰る途々ガラツ八はこんな事を言うのです。

「俺もそう思うよ」

平次はケロリとして、もう考えている様子もありません。

「じゃ誰が殺したんでしょう」

「誰でも宜いじゃないか」

「へエ——」

「俺はもう帰って一杯やって寝るよ。浪人者の高利貸が首を縊くったところで、
晩酌ばんしやくを休むわけには行かない」

市ガ谷から九段へ出て、江戸の夕暮を眺めながら、恋女房のお静が待っている家へ帰るのです。平次はもう宗方善五郎殺害事件などは考えてもいない様子です。

「でも——」

「御守殿お茂与に頼まれたことが気になるのかい。じゃ、お前だけ引返して、こう言うが宜い——平次は盲目めくらじゃない。余計な細工をして、飛んだ罪を作るのは止した方がよかろうとな」

「親分」

「何をもぞもぞして居るんだ、——平次を担かつごうなんて太え女ふてに掛り合つて居ると、お前もひどい目に逢わされるぞ」

「へエ——」

まだ腑ふに落ちない様子のガラツ八を残して、平次はさつさと自分の家へ引揚げてしまいました。

その翌る日。

「た、大変ッ。親分」

朝のうちからガラツ八の大変が鳴り込んで来たのです。

「あ、脅おどかすなよ、八。朝の味噌汁が胸つかに問つえるじゃないか、——どこの猫の子がいったい五つ子を産んだんだ」

「そんな話じゃありませんよ親分。市ガ谷御納戸町の——」

「まだそんなところをせせせっているのかい。三年あさってもあの殺しは下手人げしゅにんが出て来ないよ。馬鹿だなア」

「親分、そんな話じゃねえ。お茂与が殺されたんですよ——昨夜ゆうべ」

「何んだと？」

「それ、親分だって驚くでしょう。御守殿お茂与があの家の大納戸の中で、細引で絞められて冷たくなって居るんだ、——死顔を見るとあの女には悪相がありますぜ」

ガラツ八の報告はさすがに平次を驚かせました。事件は全く思いも寄らぬ方に発展したのです。

お納戸町の宗方家は上を下への騒ぎです。番頭に案内させて奥へ行つて見ると、美女のお茂与は主人の善五郎を殺したという、凄まじい細引で喉を締められ、錢箱の山の前にこと切れていたので。

「この通りでございます、親分さん」

場所は亡き善五郎が溜め込んだ夥おびただしい錢箱の前、お茂与は細引で喉を絞しめられて、黄金の中に死んでいたのです。

「親分」

八五郎はさすがにこの旧知の女の死骸を見ると緊張きんちようしました。

「今度は外から曲者が入ったのじゃない。なんの細工もないからお前でも判るだろう。お茂与の追善に一つ真物ほんものの下手人を挙げて見ちゃどうだ」

平次はからかいますが、八五郎たった一人であんよするとなると何処から手をつけて宜いか、まるつきり見当も付きません。

「判ったか八、戸締りに異常はなく、外には柔かい土を踏み荒した跡もないから、この下手人は家の中の者だ」

「へエ、あつしでもそれくらいのこととは判りますが」

「お茂与が錢箱を開けて見ているところを、後ろから忍び寄って絞めたんだ。

下手人が近づくのをお茂与ほどの女が知らずにいる筈もないから、こいつはお茂与に近い人間で、お茂与は大して驚きもしなかったと見る方が宜い」

平次はお茂与の死骸を前に、次第に謎をほぐして行きます。

「すると親分？」

「お茂与が我が物顔に小判を眺めているところを、後ろへ廻って首へ細引をかけた、——前の晩主人の善五郎の首に巻いた細引だ。お茂与はその人間には驚かないが、細引には驚いたろう。ハツと思うところを、グイグイと絞めた。若くて張りきっていて、お茂与憎さで一パイになって居るから情けも容赦もない。

お茂与は見事に自分の掘った穴に落ち込んで死んでしまったのさ」

「自分の掘った穴ですって、親分」

「そうさ、自分の拵こぎえた筋書すじがき通りの死にようをしたのだ」

平次の言う情景シーンは凄まじいが併しかし争う余地のないものでした。お茂与のような賢い女が、全く予期もしない相手のために、ゆうべ善五郎の首に巻いた細引で、驚愕と恐怖のうちに苦もなく殺されてしまったのでしよう。お茂与の死顔にこびり付く表情が、雄弁にそれを語って居るのでした。

「親分、誰です、下手人は？」

「——」

「親分」

「お化けだよ」

「へエ——」

「善五郎の幽霊だな」

「そんな馬鹿な」

「いや本当だ。さあ帰ろうか八。お茂与は悪い女だ——お前は美しい女を皆んな善人だと思つてゐる様だが、こんな悪い女は滅多にないよ。世話になつた善五郎の首へ繩を掛けたのは、あのお茂与さ、——尤も善五郎を殺したのはお茂与じゃない。が、昨夜の下手人は、善五郎を殺したのをお茂与と思ひ込んでやつたんだ」

「さア判らねえ」

平次の言葉の意味は、八五郎にもよく判りません。

番頭も手代も倅の甲子きね太郎もおりました。朝の光の中に曝さらされたお茂与の浅ましい死骸を前に、平次は静かにつづけるのです。

「最初から順序を立てて話してやろう、宜いか八」

「へエ——」

「主人の善五郎は武家の出だ。金は出来たが中氣にあたつた。昔自分が殺した有峰松次郎の兄の杉之助は同じ町内に住んでいる。いつ敵名乗かたきなのりをして来るか判らない。その上弟の敵を討った杉之助は世間への申訳、故郷へ帰る名聞を立てるために、宗方善五郎の旧悪の数々を言い立てるに違いない。それが善五郎には何より辛つらかった。その有峰杉之助の刃を、不自由な身体でどうして防ぎきれよう——善五郎はそう考えた。その考えを側たから焚き付けたのは、近頃善五郎に愛想あいそを尽かしながら、何千両という金に引かれて飛出しもならずにしたお茂も与よだ」

「——」

「お茂与の弁舌べんぜつに焚き付けられて、善五郎の恐怖は募つるばかり、とうとうお茂与の言うままに『非業に死んだら有降杉之助を調べてくれ』という書置を書い

て渡した」

「――」

「これは決して俺の拵こぎえた筋書じゃない。一々証拠のあることだ。――宗方善五郎は、恐怖と心配とでとうとう死ぬ気になった。倅へ遺書くらいは書いたかも知れないが、それは氣の廻るお茂与が隠したことだろう。中氣で手が顫えるから、武家の出でも刃物の自害じがいは覚束おぼつかない。そこで下女のお元に頼んで蚊帳かやの中釣りだと言って、細い紐を鴨居かもいに通して貫くわい、その紐の端に赤い縮緬ちりめんの扱帯しごき――死んだ娘の形見を出して結び、紐を引いて扱帯を欄間らんまにかけた」

「へエ――」

「その扱帯で縊くびれ死んだのを、翌る朝お茂与が見付け、自害じがいでは面白くないことがあったので、引おろして扱帯しごきを解き、――そのとき扱帯の端に縛つてある細紐まで解いて、押入へ投げ込み、別の細引を出して死骸の首にまき付け、人

に絞め殺されたように見せかけて、縁の外に男下駄の跡まで付けた」

「成程ね」

ガラツ八は平次の説明にすっかり圧倒されましたが、それよりも驚いたのは、番頭手代、俵の甲子きね太郎などでした。

「そのときみんなが駈け付けて、主人が人手に掛って死んだと知れては厄介やっかいだから、あとの面倒がないように、首の細引を解き、手近の押入にあった赤い扱帯しごきを出して首に巻き、もういちど自殺こしらに拵こしらえた。世間も検屍もそれで済んだが、お茂与が俺のところへ来て、俺と八五郎が乗出すことになったから、話が少し厄介になった」

「——」

「俺が来て見ると、——死体を見付けたとき、首に細引を巻いていたとお茂与は言うが、死骸の首の縄の跡などというものは容易に消えるものじゃない。善

五郎を殺したのは、間違ひもなく扱帯だ。鴨居にはそれを掛けた跡があり、縮緬の扱帯の端には、萌黄の紐を結んだ跡まで残っている。下女のお元の話をして、俺は、何もかも読んで了ったよ」

「お茂与が有峰杉之助に罪を着せようとしたのは、どういうわけでしょう」
ガラツ八の疑いは尤もでした。

「お茂与は有峰杉之助を憎む筋があつたんだ。きのうの話の中に、そんな口吻のあつたのをお前も聴いた筈だ。それにお茂与の話をした時の、有峰杉之助のお内儀の顔は容易じゃなかつた。あんな慎しみ深い武家のお内儀が、あれほど顔色を変えるのは容易のことじゃない」

「へエ、——成程ね」

「お茂与は有峰杉之助を下手人にして、存分に思い知らせてやりたかつたんだ」
「ところでお茂与を殺した下手人は？ 親分」

ガラツ八はようやく結論を引出すことが出来たのです。

「この中にいる筈だ、——きのうの朝、お茂与が主人善五郎の首から扱帯しごきを解いて、細引を巻き付けているところを、チラと見た者があるに違いない。それは多分下女のお元だろう」

下女のお元はあわてて唐紙の蔭に顔を引込めました。

「お元はそれを黙っている筈はない。日頃お茂与を憎みつづけて来たから——キツト誰かに言った。俺にはその相手もよく判っている。その相手は、お茂与が主人の首に細引を巻いていたと聴いて、カツとしたのも無理はない。夜になつてお茂与の様子を見ると、ここへ入って錢箱の蓋ふたをあけ我物顔に小判を眺めて喜んでいたので、もう我慢が出来なかつた。いきなり飛び込んで、——ちようど押入に投げ込んであつた因縁いんねん付の細引で殺してしまつた」

平次の論告は終りました。

「親分、——その通りです。少しの違いありません。私を縛って下さい。あの女に親を殺されたと思い込んで私はお茂与を殺しました」

平次の前に這い寄るように、自分から両手を後ろに廻したのは、伴の甲子太郎でした。

「お前さんは何をあわてるんだ。親旦那は首を縊くって死んだ。召使のお茂与はそれを悲しいと言って、翌る日首を縊くって死んだ。あつしはそれを見届けに來ただけじゃないか、なア八」

平次は静かに立上がり様、呆氣かえりに取られている八五郎を顧みかえりました。

「その通りだ。それに違げえねえ。親分、偉いッ」

八五郎は宙に泳ぐように、それに続きます。

「有難い、親分」

力も勢いも抜け果てたように、甲子太郎はペタリと坐って、二人の後ろ姿を

伏し拝みます。

「それじゃ帰ろうか、八」

「親分、見て居て下さい。こんな商売を止して、私は裸になって出直しますよ」

甲子太郎の声はその後ろに追いつがります。

平次はそれには応こたえませんでした。まだ昼には間のある明るい秋の往来へ飛出すと、何もかも忘れてしまったように黙りこくって家路を急ぎます。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

初出―「オール讀物」昭和十五年十月号 文藝春秋社

底本―「錢形平次捕物全集」第六卷 河出書房 昭和三十一年七月三十日初版

編集・発行
銭形倶楽部

遺書の罪



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>